
君と僕の歩く道

漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と僕の歩く道

【Nコード】

N6178Z

【作者名】

漣

【あらすじ】

恋がしたくて、たまらない高校生、月原美織。

新しい出会いが欲しくて胸を膨らませていた。

そして、美織が恋した先輩、

滝流星。

美織と流星の純愛物語。

出会い（前書き）

はじめまして！

滞です☆

処女作ですが、よろしくお願いします！

出会い

くプロローグく

どうして、こんなにも辛いんだろう。

好きな気持ちは君には届かないのかな？

私は、幸せになれないのかな？

誰か…

教えてよ。

第一章、出会い

桜の舞う坂道。

私は、ゆつくりと慣れない通学路を登る。

月原美織。 15歳。

高校生になる。

恋がしたくて、新しい出会いを楽しみにしてる。

恋なんて、くだらないと思ってた。

だけど、中学の頃二年間も好きだった人がいた。

初恋だった。

臆病な私は、想いを伝えられないまま、

卒業してしまった。

だから、

高校生になったら、素敵な恋がしたい。

ずっとそう思ってた。

そして、ついに入学式。

「桜ヶ丘高校」

私が通う学校。

私が恋を見つける学校。

出会いは突然

ガラガラ：

先生が教室に入ってきた。

私は、1年C組。

同じ中学のこはいない。

みんな、それぞれ希望する学校が綺麗に別れたらしい。

中には県外の学校に入学する人もいた。

高校から寮生活なんて、考えられなかったから、

私は、一番近い学校を選んだ。

近いといっても、3駅先の学校だ。

ぼーっと先生の自己紹介を聞いていたら、

隣の女子に話しかけられた。

「名前は？」

人見知りがちな私は、小さい声で、

「月原…美織」

とだけ、答えた。

すると彼女は、

「私、霧島春！春って呼んでね！」

春…

そんな名前にピッタリな可愛らしいこだった。

「よろしくお願いします。美織でいいです」

まだ、心を開けてないせいか、敬語になってしまう。

「ダメでいいから！美織、よろしく！」

春が笑うと、春の周りはピンク色に明るくなる。

すると先生が、

「じゃあ、先輩たちに学校案内してもらうので、廊下に並ぶように。」

そう言い残して、先生は教室を出た。

正直、先輩たちに学校案内してもらうなんて、高校生にもなってダサイと思った。

春も同じ気持ちみたいだ。

だるいとか、ありえないとか、色々いつてる。

私たちは、静かに廊下に並ぶと先輩たちがやってきた。

一人ずつ、ペアがつくみたいだ。

私の前にきたのは…

「俺、滝流星。よろしく」

第一印象

「俺、滝流星。よろしく」

滝…流星…先輩。

第一印象は、爽やかな好青年。

周りの男の先輩はみな、派手な色の髪の毛をしている。

滝先輩は、普通の黒髪。

第一印象は、私の中では重要だ。

面食いとかではない。

人見知りがちな為、見た目で判断するしかなしのだ。

人見知りがなおれば、見た目なんか関係ないけど…

とりあえず簡単に自己紹介をした。

「月原美織です。よろしくお願いします。」

「おう。じゃ、行くか。」

そう言われて先輩の後を駆けあしで追う私。

そんな、

私たちを見て、同級生たちは羨ましがる。

滝先輩は、入学したばかりの一年にもモテるみたいだ。

「ここが職員室。で、隣が給湯室。」

すらすらと滝先輩は案内していく。

「月原？」

滝先輩に呼ばれ、我に返る。

「なっ…何でしょうか!？」

びっくりして、つい変な口調になってしまう。

「ははっ。月原、面白いな。」

滝先輩が笑った。

先輩は笑うとエクボができるんだ。

先輩を知れて、嬉しかった。

先輩の教室を案内された。

「俺、一番前でさあ…寝れねえんだよな」

そんな先輩の愚痴も嬉しかった。

先輩の一言で私まで笑顔になった。

自分の気持ちに気付くまで、時間はかからなかった。

先輩と私

先輩が一通り、学校案内を終えた。

「やっと終わったな！疲れたよな…無駄にひれーもん、ウチの校舎。」

疲れてないよ、先輩。楽しかったから。疲れなんて感じないよ。

そう言いたい。

だけど、私はどこまでも臆病だ。

そんなこと言えない。

素直になれない。

だから私は、

「そうですね。広いですね。」

そんな事しか言えなかった。

先輩が私を教室に送った後、

「わからないことあったら何でも聞けよ。待ってるから。」

そう先輩は言うど、私の頭をくしゃつと撫でた。

＜待ってゐるから＞

そんな言葉、先輩だからドキドキする。

だけど私はまだ先輩を知らない。

知らないことが多すぎる。

知ってゐるのは名前と学年。それと、笑うとエクボができることくらいだ。

先輩を知りたい。

先輩とまた会いたい。

…私、会いに行ってもいいかな…

「美織ー！どうだった？ってか、美織、滝先輩だったでしょ、いいなあ！」

相変わらず春はテンションが高い。

「学校、意外と広いね。」

あえて、先輩の事には触れなかった。

だけど春は、

「それよりねっ！滝先輩、どうだったの？！」

触れないでおいたのに…。

「まあ、いいヒト…だったよ？」

そんな曖昧な答えしか出てこない。

春に、滝先輩に特別な感情を抱いているなんて言えない。

「いいなあ、美織！幸せ者めっ！」

春は私の肩を軽く叩いた。

まだ春には勘付かれていないようだ。

「そうだっ！美織！帰り、学校の近くにで来たアイス屋さん行かない？！」

さすがに4月にアイスは寒いと思ったが、暇だし、春と遊びたかったから、

「いいよ。」

といった。

「制服でプリとろー！」

春が楽しそうに予定をたてている。

だけど、春の話なんてほとんど頭に入っていなかった。

頭のなかは滝先輩。

こんなにも滝先輩に夢中な私。

今日、初めて会ったのに、どうかしてるかな？

入学初日、私の恋が始まる。

絶望

放課後、私と春はお喋りをしながら近くのアイス屋さんに向かった。

「美織ー?! どれにする? 春はあ…うーん…イチゴチーズケーキっ
!」

「私はこれにする。」

私はシンプルな抹茶アイスを指差した。

「ぶっ。美織、渋いっ!」

春が隣で爆笑している。

だって、好きなんだもん。

私と春は、アイスを受け取り、カウンター席に座る。

「美織ー! 抹茶、ちょうだい?」

「えーっ。渋いとか言って、爆笑してたくせに。」

「…いつ、いいじゃんっ! えいっ!」

「あー! こんなに! 半分も! 返せー! 抹茶!」

「半分も持ってってないよっ! あー、美味しい!」

「吐け！吐け！春！」

「吐け！とか、汚いよっ！いいじゃん、春のもあげるから！」

すごく楽しい。

春のハイテンションも悪くないと思った。

それから、一時間くらい他愛ないお喋りをした私たちは、見せを出た。

「よしっ！美織ー！プリ行くよっ！」

春に引っぱられて、ゲームセンターに入る。

「あっ、人入ってる。待ってよ。」

中には男物のスニーカーと女物のローファーが並んでいた。

カップルだろうか。

私も滝先輩と…

そんな事を妄想していると、

「あっ！出てきた！…あれ？…滝…先輩？」

滝先輩の単語を聞いて顔を上げる。

目の前にいたのは、可愛らしい女の子と、…滝先輩だった。

紛れもなく、これは滝先輩だ。

隣の髪の毛の長い、スタイル抜群な綺麗な女の子は…きっと…滝先輩の彼女。

その場で倒れそうになるのを、必死にこらえる。

「おーっ！月原！」

先輩は、私の頭をくしゃっと撫でる。

…いや…撫でないで…

先輩の手を思いっきり振り払い、私は外へ走り出した。

春が追いかけてくる。

ばれたよね。

…先輩への気持ち…

「美織！待って！」

春が私の腕をつかむ。

「美織どうしたー、泣いてる…の？」

春に言われて、
やっと気付く。

私がないていること。

：先輩への気持ちのおおきさ。

先輩、

叶わないの？

私の恋、

叶わない？

そう思うと余計涙が出て来た。

叶わない

叶わないんだ、この恋。

なんだか、先輩に恋したうちがバカだった。

なんで先輩なんか…

先輩なんか、好きじゃないし…

そうやって、自分の気持ちを否定するけど、

そんなんじゃ、私が惨めなだけだ。

泣きたくなんかないのに、涙が溢れる。

「…美織…。美織、滝先輩の事…」

ああ、やっぱり気付かれた。

先輩が好きなこと。

春には気付かれた。

「…っ…はっ…る…」

嗚咽で話せない。

春、春

私、先輩が大好きだよ…

こんなに苦しくなるくらい、大好きだよ…

「美織…いっぱい泣な。ずっと春が隣にいるから。」

春のその優しさに、また涙が溢れる。

先輩の全てを知りたいと思った。

だけど、知りたくない事もある。

こんな現実、知りたくなんなかった。

先輩への恋が叶わなくなるなんて、

信じたくない。

彼女がいるのも、おかしくなんかない。

だけど、先輩が彼女だけを見ている瞬間なんて、

見たくないよ。

もう、

私だけを見て。

そんなことも言えなくなった。

また一つ、先輩を知ってしまった。

気持ち

数時間後、やっと気持ちが落ち着いた。

と、いうか泣きやんだ。

「美織…話せる？」

私はコクんと頷いた。

「美織は…滝先輩が…好きなの？」

「…好きだよ…だれよりも好きだよ…」

初めて声に出して言った。

また涙が溢れそうなのを、必死にこらえる。

「美織…見たよね？さっきの…」

また頷く。

「…滝先輩…の…彼女…草原美岬先輩…」

名前も知らなかった、先輩の彼女。

草原美岬。

美人で可愛くて、滝先輩とお似合いだった。

「…うん…」

「美織、諦めるの？」

正直分からない。

諦めたいのか、まだ好きでいたいのか。

分からない。

「分からない…」

「そっかあ…春は、諦めなくていいと思う！」

春がいつものテンションで話す。

「好きになるのは、悪いことじゃないし、先輩たちに、迷惑かけてないから！…美織、片思い、平気？」

「うん、平気。」

私なんか特に、片思いには強い方だ。

逆に両思いの方が耐えられないかもしれない。

先輩を見ているだけなら…

この時、私はこんな甘い考えに甘えていたんだ…

草原美岬

草原美岬。

それが彼女の名前。

どうしてこんなにも私は恵まれないんだろう。

そんなことさえ考えた、3日前の出来事。

先輩に彼女がいると知ってから3日がたった。

あれから先輩には会ってない。

いつも遅刻気味に学校に来ている先輩とは会わないし、

先輩は部活があるので、帰りも会わなくて済む。

一年生は、明日部活見学があるので

まだ部活は始まっていない。

だから、上級生よりも早めの帰宅だ。

先輩に会いたい。

だけど、それは草原先輩にも滝先輩にも迷惑がかかる。

私の片想いは、先輩たちに迷惑をかけないって約束だから。

だから、会っちゃ行けないんだ。

この日も私は1人で駅にいた。

家に帰るためだ。

いつも通りのホーム。

電車を待っていると、

桜ヶ丘高校の制服が見えた。

スカートのラインが緑だから、2年生だろう。

桜ヶ丘高校は、学年を一目で分かるようにと、スカートとズボンにはいつている、チェックのラインで学年が分かるようになっていた。

一年生は赤。二年生は緑。三年生は青だ。

10mくらい先にいる二年生は、立っているだけで絵になる。

髪の毛が長くて顔は見えない。

回送の電車がホームを通過した瞬間、

二年生の顔が見えた。

草原…美岬。

紛れもなく、あの顔は草原美岬だった。

電車が同じだったなんて、知らなかった。

今、1番会いたくない。会っちゃいけない、人に会ってしまった。

私が草原先輩を見て固まっていると、草原先輩と目があつた。

目を反らしたいのに反らせない。

数秒間見つめあっていると、草原先輩がこっちに向かってくる。

来ないで。

そう心の中で叫ぶ。

でも、草原先輩の足は止まらない。

ついに草原先輩が私の前で仁王立ちになる。

風と共に草原先輩のいい匂いがする。

草原先輩が口を開く。

「…あなた…流星が好きなの?…」

流星…

好きなの？…

草原先輩の声が頭の中で繰り返される。

「ねえ、答えて。好きなの？」

「わたしは…」

私が答えられずに黙っていると、

「好きなのかって聞いてるんだけど？」

口調は穏やかだが、目は笑っていない。

怖い。

それが草原先輩の第一印象だった。

「答えなさいよっ？」

ビクッと私が揺れる。

ホームに沈黙がはしる。

草原美岬。

こんな怖い人をわたしは敵にまわしてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6178z/>

君と僕の歩く道

2011年12月26日16時53分発行